

百済寺跡

—百済王氏の寺—

● くだら であら 百済寺跡の発掘史

百済寺跡では、戦前の昭和7年(1932)から平成25年(2013)にかけて断続的に実施されてきた発掘調査によって、伽藍がらんの全容がほぼわかってきました。最初の調査では、寺域の南辺中央部に南門を設け、南北中軸線の北延長線上に中門・金堂・講堂の順に並べ、中門と金堂に取りつく回廊内の広場には、東塔と西塔を並べた、「2塔1金堂式」の伽藍であることが明らかとなりました。この伽藍配置は、奈良の薬師寺や大安寺、東大寺と共通しています。奈良時代後半～平安時代の土器・瓦が出土することなども加えて、これらの遺構こそが百済くだらのこにきし王氏の氏寺＝百済寺であるとわかりました。昭和16年(1941)には国の史蹟に指定され、昭和27年(1952)には特別史蹟に昇格しました(平成29年現在、大阪府内の特別史蹟は、百済寺跡と大坂城跡の2箇所のみ)。昭和40年(1965)の調査では、講堂の北側で食堂じきどうとみられる建物や、回廊の東側で基壇の上に礎石建物や東門が見つかっています。昭和42年(1967)に、史蹟公園として整備しました。

平成17年(2005)から平成25年(2013)にかけて史蹟公園の再整備に向けた調査を行ないました。この調査では、築地塀ついでいが寺域を一辺約140mの方形に取り囲むことや北門を新たに確認しました。寺域内は、「堂塔どうとう院」・「僧院そういん」とした主要な堂塔が建ち並ぶ区域の両側に、「東南院とうなんいん」・「東北院とうほくいん」・「西北院せいほくいん」とした付属施設が設けられていることがわかりました。



百済寺跡の遠景写真(南東方向を望む)